

特集：入学

将来の自分を見つめて

臼井 健郎（筑波大学 生命環境科学研究科）

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。入学式からの忙しい日々もやや落ち着き始め、そろそろ新しい生活にも慣れてきたところでしょうか？ 新しい環境で不安に思うことも悩むこともあるとは思いますが、そのような時は気分転換として気軽に話をしに来てください。

さて、折角紙面を頂いたので、個人的な回想を交えて私が日ごろ思うこと、皆さんに心がけて欲しいことを紹介したいと思います。

私は大学院卒業後、一昨年9月に本学に着任するまで政府系某研究所で働き、その間、運のよいことに一ヶ月間ドイツミュンヘンで、また一年半ほど英国グラスゴーとマンチェスターで研究する機会がありました。欧米の研究室は良くも悪くも多国籍社会であり、日本とは文化・制度・習慣が異なる中、時には衝突し、時には妥協しながら研究室が運営されているのを目にしてきました。そんなある日のこと、別の研究室の女性が博士号を取得し、お祝いのパーティーがありました。私が知っている日本の大学での課程博士取得と比較してヨーロッパでの博士号取得は一般に難しく、彼女も苦労した末に一流ジャーナルへの掲載も果たし、めでたく博士号が授与されたのです。これから研究者としての一步を踏み出す彼女とそのとき始めて話をしましたが、今後のことに話が及んだとき、彼女の口から思いもよらない言葉を聞かれました。「来月から研究とは別の職に就くことになった。もう研究はしない。私は研究に向いてないことが良く分かったから。」と言うのです。非常に驚きました。長年の苦労の末に『博士号』という資格を得たのです。そのためには相応の研究に対する情熱も彼女は持っていたと思います。にも関わらず、その資格とも科学の世界とも無縁といってよいほどの職種へ転向することが、その当時の私には「もったいない」としか思えませんでした。

しかし、自分自身異文化に暮らし、周囲の人たちと関わっていくうちに、だんだんと違った思いに変わってきました。彼女は自分で自らの適性を冷静に判断している。しかも、じっくりと時間をかけて。そして最も重要なことは、実際に『苦労と成功の両方の経験』を通じて結論を出していることだ、と思うようになりました。自分のことを翻ってみれば、とにかく研究というものを

してみたいとの思いだけで大学に入り、大学院を卒業してしまっていました。結果、自分が好きなことを職業に選んでしまったために他に逃げ場を無くし、精神的に参ってしまい、軽い鬱になることもありました。今思えば、自分が研究という単一の価値観しか持っていなかったことがいけなかったのでしょう。その点、彼女は大学・大学院の期間に自分の将来を見据え、着実に駒を打っていたのだと思います。

皆さんの中には既に将来のイメージがはっきりしている人も多いと思います。逆にまだ何も考えていない、または何をしたいか分からない人も居るでしょう。今はまだ将来何をするかが決まって無くて良いし、ある程度幅を持たせておいたほうが良いように私は思います。ですが、特に「何をしたいかまだ分からない」人は、是非いろいろなことにチャレンジして欲しいと思います。頭で考え、想像するだけでは分かったことになりません。何にせよ、やってみないと『実感』として得ることは出来ないからです。

「いろいろ」と言われても困るという人は、クラスの仲間と同じことをチャレンジすることから始めてはどうでしょう。そしてチャレンジする上で重要な点は、うまく行かない段階で「これは自分に合っていない」と判断するのではなく、『成功してから』判断することです。うまく行かない段階で心ならずも止めてしまった場合は『保留』にしましょう。そして、やりたい、あるいはやってもいいかなと思える職種の幅を広げていってください。大学時代はいくらでも失敗してよい時代です。誰も目くじら立てて怒ったりしませんので、たくさんチャレンジして欲しいと思います。

4年という期間は長いようで、あっという間に過ぎてしまいます。しっかりと社会に出る準備を整えましょう。皆さんの大学生活と先々に幸あらんことを！

Contributed by Takeo Usui, Received April 28, 2008.